

寝取られ伊吹の  
異種姦妊娠


罠に掛けられた少女が孕んだのは

異形の仔だった…。

基本CG:19枚  
本編225枚+テキストなし54枚  
総テキスト量 2万字の大ボリューム!






A blue-haired anime girl with long hair and a white dress with green triangles is standing in front of a large mechanical structure. The background is a solid blue color. The girl has a determined expression and is looking slightly to the side. The mechanical structure behind her is complex, with various pipes, valves, and a large cylindrical component on the right. The overall style is that of a Japanese anime illustration.

「この一刀、伊吹の嶺（たかね）にかけてっ！」





凜とした掛け声とともに伊吹の振り下ろした刀が  
量産型セイレーンを両断した。

剣戟と同時に放たれた魚雷は一直線に航跡を描き、  
雷光一閃、別の量産型の横っ腹を吹き飛ばして  
大きな水しぶきを跳ね上げた。



重巡洋艦・伊吹。

雷撃戦を得意とする重桜陣営の中でも、  
一際魚雷攻撃に特化した艦船である。

重巡本来の砲撃戦能力の高さと相まって、  
彼女は他の追従を許さない強さを誇っていた。

今日もまた彼女の獅子奮迅の活躍が艦隊に勝利をもたらした。










A dark, atmospheric illustration featuring a blue-haired anime girl with small horns and a sailor-style uniform. She is holding a large black folder. In the background, a male sailor is visible. The scene is dimly lit, with some light reflecting off the girl's face and the folder. The overall mood is mysterious and slightly somber.

コンコン、とノックの音が響く。

中からの返事を待って、伊吹は静かに執務室の扉を開いた。  
少し緊張した面持ちで部屋の中へと歩みをすすめる。





窓際に据え付けられた机の前では指揮官が  
難しそうな顔をして書類に目を通していた。  
が、伊吹が側にくると顔を上げてにこやかに微笑みかけた。

「やあ、おかえり。」苦勞だったね。

本日の戦闘でも大活躍だったじゃないか。」



指揮官の温かな視線を受けて、伊吹の顔が「瞬ほころぶ。けれどもすぐにキリツとした表情に戻ると、取り繕うように言葉を発した。

「あ、主殿のおかげです。主殿の的確な指示があればこそ、伊吹は力を振るえます……。それに、主殿に喜んでもらえるなら伊吹はもつとがんばれますから。」  
「ははっ、それは心強いな。

オレも、母港の誰よりも伊吹を頼りにしてるよ。  
戦闘でも秘書艦としても、伊吹が「一番」生懸命だからな。」




An anime-style illustration featuring a young woman with long, flowing blue hair and small black horns. She has one blue eye and one red eye, and a small pink mark on her cheek. She is wearing a black and white outfit with a high collar and a white sash. She is looking towards a man in a white uniform and a white cap, who is partially visible on the right side of the frame. The background is a blurred indoor setting with warm lighting. There are several colorful bokeh circles in the foreground.

「そんな……あ、ありがとうございます、主殿……。」

話しながら、伊吹の頬に徐々に紅が差していく。  
顔を赤らめ、嬉しそうに気恥ずかしそうに話すその姿は、  
まさに「恋する少女」のそれだった。

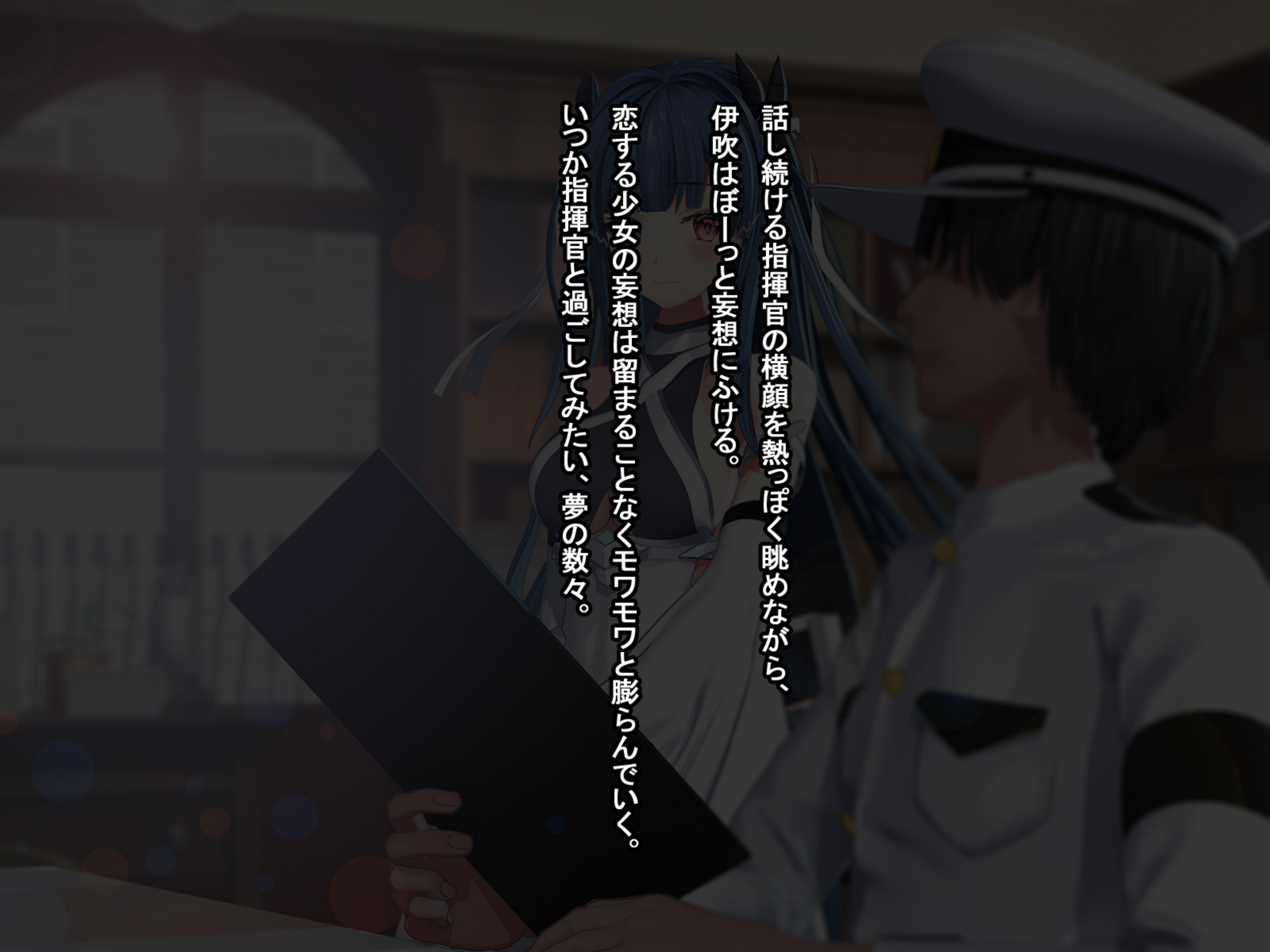




一方の指揮官の態度には下心は一切見られず、  
ただただ信頼できる仲間として彼女に接していた。  
今の言葉にしても他意なく素直に褒めているだけで、  
伊吹にはそれが少し残念だった。

《主殿に求められれば、伊吹はいつでも……》



The background is a dark, moody illustration. On the right, a young man in a white uniform with a peaked cap is shown in profile, looking towards the left. On the left, a young woman with long, flowing blue hair and red eyes is visible. She is holding a large, dark, rectangular object, possibly a book or a tablet. The overall scene is dimly lit, with some light reflecting off the surfaces of the characters' clothing and the object she is holding.

話し続ける指揮官の横顔を熱っぽく眺めながら、  
伊吹はぼーっと妄想にふける。

恋する少女の妄想は留まることなくモワモワと膨らんでいく。  
いつか指揮官と過ごしてみたい、夢の数々。



「……それでこの書類を今夜中に片付けてしまいたいんだ。  
伊吹、付き合ってくれるか？」

ぼんやり夢想の世界を漂っていた少女は、  
突如名前を呼ばれたことで現実へと連れ戻された。

「も、もちろんです。伊吹は主殿の秘書艦ですから……！」

慌てて応えながら、指揮官の様子をうかがう。  
不審に思っている様子はなさそうだった。

ほっと一息をついて、伊吹は再び指揮官の横顔を眺めた。





（主殿と二人……こんな日々が、ずっと続けばいいのに……。）









「指揮官くん、今少〜い〜と〜」

「指揮官さま、」相談したい〜とが……。」

「指揮官、委託が終わったです。」

母港にいと多くの艦船が指揮官を慕っている様子を  
たびたび目にする。

ある艦船は少女のように頬を染めながら、  
別の艦船は誘惑するような視線を送りながら、  
指揮官に各々の好意を寄せている。

（主殿……また他の子と楽しそうにお話している……。）



指揮官は誰にでも別け隔てなく接するタイプで、  
みんなと公平に付き合うように努めているらしかった。  
その証拠に、彼はどの艦船ともケツコンにいない。  
けれどもいついつ光景をみるたび、  
伊吹は心がざわついてしまうのだった。

敬愛する指揮官が他の子たちにとられてしまうんじゃないか、  
という漠然とした不安感。





誰よりも指揮官にとつての特別でありたいと  
願うからこそ抱く感情だった。

けれど実は伊吹には、

指揮官から好意を受けている自信が二つだけあった。

（伊吹が母港に来たその日から、  
主殿は伊吹を常に秘書艦に…。

それだけ伊吹を特別に思ってくれているはず…。）

もともと、奥手な彼女には指揮官の気持ちを確認するすべはなく、  
指揮官の二挙手一投足に悶々とする日々を送るだけ。





指揮官の特別でいたい。  
指揮官の役に立てるなら  
他の艦船にはできないうちでもじてあげたい。

……できるうなら、

指揮官の初めてのケツコン相手になりたい。

そんな想いだけが伊吹の中でどんどん大きく膨らんでいった。





指揮官の特別でいたい。

指揮官の役に立てるなら

他の艦船にはできない」でもしてあげたい。

……できる」なら、

指揮官の初めてのケツコン相手になりたい。

そんな想いだけが伊吹の中でどんどん大きく膨らんでいった。







指揮官の特別でいたい。

指揮官の役に立てるなら

他の艦船にはできない」でもしてあげたい。

……できる」のなら、

指揮官の初めてのケツコン相手になりたい。

そんな想いだけが伊吹の中でどんどん大きく膨らんでいった。



指揮官の特別でいたい。

指揮官の役に立てるなら

他の艦船にはできない」でもしてあげたい。

……できる」のなら、

指揮官の初めてのケツコン相手になりたい。


そんな想いだけが伊吹の中でどんどん大きく膨らんでいった。









A dark, semi-transparent anime-style illustration. In the center, a girl with long blue hair and small black horns on her head looks forward with a neutral expression. She has blue eyes on the left and red eyes on the right. She is wearing a dark, form-fitting top with white and red accents. To her right, a boy in a white uniform with a peaked cap is partially visible, looking down. The background is dark and indistinct. Overlaid on the girl's chest is the Japanese text "転機は突然訪れた。" in white.

転機は突然訪れた。



「……。」

「主殿……。」

机の前で無言のまま項垂れる指揮官。  
そこいつもの笑顔はなく、  
重苦しい空気が辺りを満たしている。

その側では伊吹が心配そうな面持ちで指揮官を見つめていた。

机の上には二枚の紙

——僻地への転属命令を記した辞令——が置かれていた。  
しかも内容は輸送任務。

華々しい戦果を持つ指揮官に下されたとは、  
にわかに信じがたい命令であった。



「みんなの……おかしいです。」

「主殿は誰よりも努力していて……」

戦果だってたくさん上げています。

先日だって勲章をいただいて……。

それなのに、後方での輸送任務だなんて。

主殿ほどの有能な指揮官が前線から離れてしまったら

勝てる戦にすら勝てなくなってしまうすー!」

珍しく強い口調で伊吹がいう。



あまりに理不尽な内容に、彼女は怒っていた。  
指揮官はその言葉を黙って聞いていたが、  
やがて重い口を開いた。


「伊吹、ありがとう。」

秘書艦として、事務にも戦闘にも関わってくれている伊吹に  
そんな風に言ってもらえてオレも嬉しいよ。  
けどな、どうしようもないんだ。

これは司令部からの正式な辞令だから。  
やりきれない気持ちは確かにあるけど、  
軍の中でそんな個人の希望を押し通すわけにはいかない。  
なに、司令部にも考えがあつてのことだ。  
命令には従うよ。」







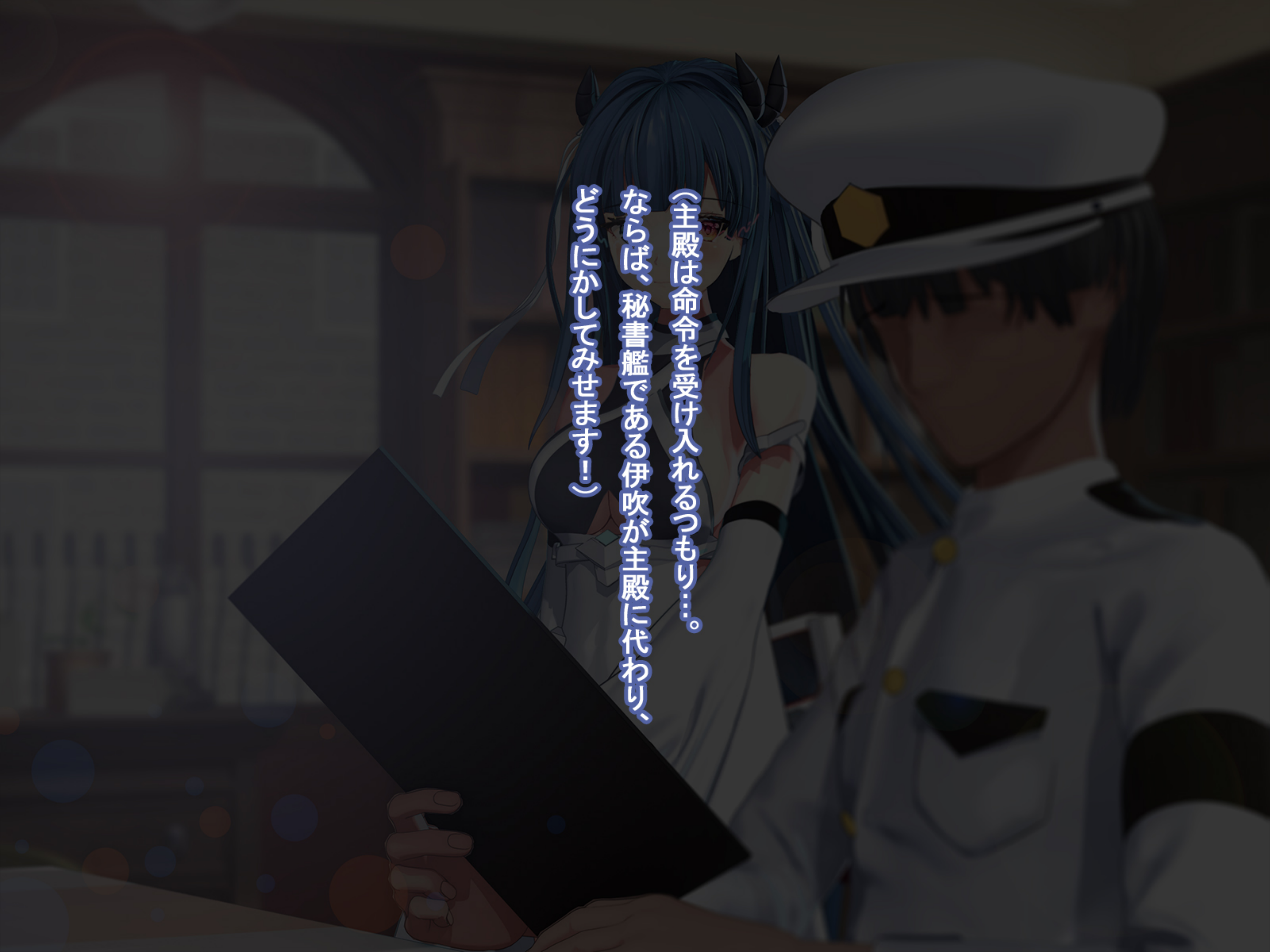
空元気で弱々しく伊吹に微笑みかける指揮官。  
その顔を見て、伊吹はキュツと胸を締め付けられる思いがした。

僻地に飛ばされるだけじゃない。  
輸送任務となれば伊吹たち艦船を  
指揮する立場ではなくなってしまう。

つまり、指揮官にはもう会うことが  
ままならなくなってしまうのだ。

そうになったら、伊吹は胸に秘めた思いをどうしたらいいのだろう？





(主殿は命令を受け入れるつもり…。  
ならば、秘書艦である伊吹が主殿に代わり、  
どうかしてみせます！)







「それで私のところへ？」

眼前の男の問いかけに、伊吹は「クリとうなずいた。

どうにかすると言っても伊吹にできる」とはそう多くない。  
戦闘以外となれば尚更である。

その中でかろうじて彼女が思いついたのは、  
指揮官が「上官殿」と呼ぶ男のことだった。

秘書艦をしているときに何度か見たことがあるのこの男は、  
立派な階級章をつけ、いつも落ち着いた口ぶりと態度を崩さず、  
いかにも組織を束ねる偉い人間という風だった。  
この男なら人事にも融通が効くかもしれない。  
そう考えての訪問だった。





「ふん。あいつも案外臆病者だな。」

自ら直訴するでもなく、手持ちの艦船を通して伝えてくるとは。」

「主殿は関係ありません！」

「これは……伊吹が勝手に……。」

「ほう！では君の指揮官は「この」とは知らないのかね？」



「主殿は命令に従うつもりです。」

でも、主殿は優秀な指揮官です！」

主殿の指揮のおかげで母港の皆どれだけ助かっているか……。」

主殿がいなくなってしまったら、

この母港にとって大きな損失です！」

だから伊吹は命令の撤回をお願いしたくて……。」







「ああ、君の指揮官の有能っぷりは私も聞いているよ。  
ただ……あまり『若くて』有能なものも困りものでね。  
彼を妬む声も多いんだ。」

「……」だけの話、今回の左遷はそういうことなのさ。」

男は椅子から立ち上がると、

伊吹の横を素通りしながら独り言のようにそう言った。

理不尽な理由に、

伊吹はぎゅっと下唇を噛んだ。





（主殿は立派に仕事をこなしているだけなのに……。）

「だが君が私に相談してくれて実によかった。

私の立場なら……」

君の指揮官の左遷の話、なかったことにすることができ。」

思いがけない男の言葉に、

ぱっと伊吹の顔が明るくなった。

「えっ……！そ、それでは！」









「ただし」

突如、背後から肩に男のがっしりした両手が置かれ、  
伊吹は怯んだ。

「組織で一度決まったことをひっくり返すには  
相応の根回しが必要だ。

時間も手間もかかる。タダで、とはいかなあ。」

じつとりと嘗め回すような目つきで伊吹を見下ろす男。

その不快な視線をまともに受けて、

伊吹はぐくりと喉を鳴らした。





「い、伊吹にできることなら……」

なんでもいたします。」

「ほうほう。それはいい心がけだ。」

男の顔が、ぐいっと近づいてくる。

耳元に男の荒い息遣いが迫り、

伊吹は言いようのない恐怖に包まれた。





「それでは、君には今日から毎晩、私の部屋に来てもらおう。  
もちろん君の指揮官には内緒で、だ。

幸い、彼は何も知らんのだろう？」

では何があっても君と私だけの秘密としておけば  
他所に漏れる心配がない……………。

君にとっても都合がよいのではないかね？」

「秘密……………主殿に知られては困るような……………？  
一体、伊吹に何をさせるつもりですか？」

要領を得ない様子の伊吹に、

男はやれやれという風の顔をした。









「まるで生娘のようなことを言っじゃないか。」

君の指揮官はなににも教えてくれなかったのかね？

男と女が密会するとなれば

やることなど決まっているだろう。」

「えっ？……あつ、や、やだっ……！」

伊吹の胸元に男の手が伸び、  
ぴっちり張り付いた布地をずらして、  
形の整った乳房を露わにした。

今まで男性に見せたことのなかった柔肌を無遠慮にさらされ、  
驚きと羞恥が伊吹の顔を覆う。





身体の前でキチツと結ばれていた両手は  
男の手を遮るべく一瞬動いたが、

そのまま中途半端な位置で所在なさげに固まってしまった。

自分の抵抗がせつかくのチャンスを

台無しにしてしまうことを恐れた故だった。

「その初々しい反応、

君の指揮官は本当に手を出さなかったのか。

これほど懐いているというのに、

律儀というか、生真面目というか……。

こんな立派なものを持っているんだ。

私にしてみれば楽しめぬ道理はないのだがね。」









男の大きな堅い手が、  
思うにまかせて伊吹のおっぱいを揉みしだく。  
その柔らかさを満喫するように、  
握ったりこねたり好き放題に動き回る。

伊吹は顔を真っ赤にし、  
目には涙を浮かべながらその辱めに無言で耐えた。





（主殿に触られたことも……）

見せたことすらないのに、

ほとんど初対面の殿方にこんなこと……（。）

（でも、でも伊吹がこの辱めに耐えれば、  
主殿とお別れせずに済む……）

主殿の悲しむ顔を見ることもなくなる……）

伊吹は、主殿の一番の秘書艦……）

だから、主殿のためなら、伊吹は……（。）









ぎこちなく振り向いて、伊吹は男と目を合わせた。

「しよ、承知しました。」

貴方様が伊吹をお望みなのでしたら、

伊吹は貴方様に従います。

ですから、どうか主殿のことを……

よろしくお願いします……。」



伊吹は男に毅然とした態度で臨もうとしていたが、その声の震えを止めることができなかった。



潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し  
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。  
伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、  
彼女の心のつらさが際立つのだった。

この様子に男はえらく満足したようだった。

「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。  
代わりに君の身は私が預かった。

我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」

「ううして伊吹は、指揮官に秘密ができた。」





潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し  
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。

伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、  
彼女の心のつらさが際立つのだった。

この様子に男はえらく満足したようだった。

「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。  
代わりに君の身は私が預かった。

我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」

こうして伊吹は、指揮官に秘密ができた。





潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し  
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。  
伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、  
彼女の心のつらさが際立つのだった。

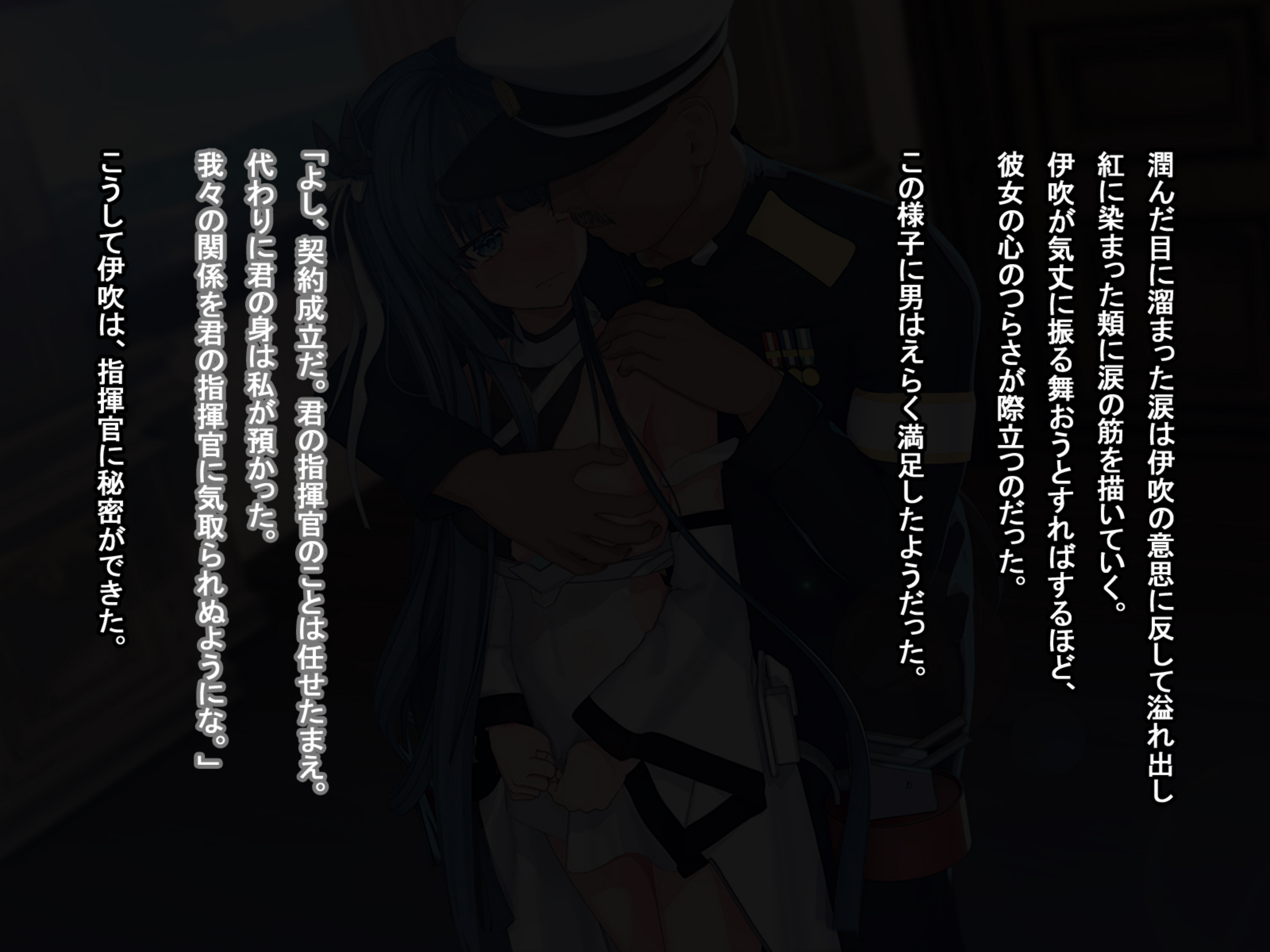
この様子に男はえらく満足したようだった。

「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。  
代わりに君の身は私が預かった。  
我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」

こうして伊吹は、指揮官に秘密ができた。







潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し  
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。  
伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、  
彼女の心のつらさが際立つのだった。

この様子に男はえらく満足したようだった。

「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。  
代わりに君の身は私が預かった。  
我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」

こうして伊吹は、指揮官に秘密ができた。





重巡洋艦伊吹

雷撃戦を得意とする重巡洋艦の中でも、  
一際魚雷攻撃に特化した艦船である。

重巡本業の雷撃戦能力の高さと相まって、

彼女は他の船を呼ぶに例えられていた。

今日もまた彼女の獅子舞団の活躍が艦隊に勝利をもたらしている。



## 清く気高き少女は、



「指揮官さん、どうして……？」

「指揮官さま……？」「指揮官さま……？」

「指揮官、艦隊が動かないです……！」

艦隊に命令する多くの艦船が指揮官を認めてくれる様子を  
みることが出来る。

ある艦船は彼女のように顔を染めながら、

別の艦船に認めるような表情を浮かべている。

指揮官さんの好意が寄っている……。

「……また他の子と……？」「……お話しして……？」



一方の指揮官の態度に下心は一切見られず、

ただただ信頼できる仲間として彼女に接していた。

今の艦隊にいてくれる重巡艦隊に集まっているだけ……。

伊吹にはそれだけで満足だ。

「……艦隊の司令官、伊吹は認めます……！」



「ふふふ、君にも私のオナマツを  
してもらいたくぞね」  
その日、伊吹がベッドに寝るやいなや、  
男はそのまま伊吹の目の前に現れた。

「おはようございます……」  
目を覚めると、ベッドに横たわり、伊吹

初めて見る男性器は独特の形をして、  
異界の生物のように感じられた。

「……ふふふに笑み込んだ愛撫が  
湧き出す感無がして、伊吹はハッとした。」

「……おはようございます……」

「……おはようございます……」  
私の身体は、おはようございますと、  
今日一日、おはようございますと、おはようございます……」

## 想い人のために理不尽を受け入れ、

「まるで生徒のたちなどと言っじやないか。

君の指揮官はなにも教えてくれなかったのかね？」

男と女が密会するとなれば、

「……おはようございます……」  
「……おはようございます……」  
「……おはようございます……」

伊吹の胸元に男の手が伸び、  
びつかりと張り付いた布地をすくって、  
影の落ちた乳房を露わにした。

今更で男性に見せたことになった素肌を無遠慮にほぐされ、  
驚きと羞恥が伊吹の顔を覆う。

「……おはようございます……」  
「……おはようございます……」  
「……おはようございます……」

「……おはようございます……」  
「……おはようございます……」  
「……おはようございます……」

今まで誰も、伊吹本人でさえも触れたことのない場所に、  
男の指が入り込んでいく。

大事な場所を無遠慮に触れられて

伊吹の心は羞恥の炎で燃え上がった。



